ラスキンの教育論

山　田　眞　實

1960年頃から，情報化社会，消費社会，あるいは後期資本主義といった多様な言葉で表現される新しい社会状況が生れ，社会構造が変化するとともに，人々の感性やものの考え方，行動・生活様式にもかなりの変化が生じてきた。これに続く1970年代，80年代には，特に思想や芸術において，「ポスト・モダン」という言葉で表現されるような新しい動きがこの時代を風靡した。極めて多様な内容を含むこの言葉は，一言にしていえば，「近代」が培ってきた様々な価値を超克しようとする動き一般を総括する言葉といえよう。

さて，ロマン派の詩人達やカーライル，ラスキン，モリスといった人々の，産業革命への抵抗に象徴される19世紀の「反近代」運動は，「自然」や「中世」，あるいは，「伝統」，「手仕事」といったコンセプトを「近代」に対峙させ，それらのもつ価値をあらためて再評価することによって，当時の「近代」なるものをのりこえようとするものであったが，「進歩」を至上目標とする，功利主義的，合理主義的発想が時代精神としてもてはやされていた当時の社会においては，彼らの「反近代」運動は，時代や社会を根本的に変革する程の大きな力はもちえなかった。しかし，その後20世紀に至って，近代社会のかかえる矛盾はますます増大し，「近代」とよばれる時代そのものへの不信感や懐疑の念が高まるにつれて，既成の価値を新たに評価しなおし，今まで無視され，否定されてきたものの中に新たな意義を求めようとする動きが生じてきたのである。言葉をかえていえば，産業革命以降，ばく進してきた近代社会が見落し，また意識的に排除してきたものの中に，今，必要なものをひろいあげ，再評価，再認識しようとする動きそのものが，今日でい

う「ポスト・モダン」であるといえよう。[1]

いわゆる「ポスト・モダン」の思潮は，建築様式に端を発しているが，建築においては，1970年代中頃に，機能本位の合理性を標榜するモダニズムを否定し，感性の自由な表現や様々な形の「装飾」に象徴されるような遊びの精神をもちこむことが好まれ始めた。また，過去の様式の折衷形式も少なからず用いられ，誇張された表現や，通俗的，商業的要素を建築スタイルにつよく反映させるという傾向もあらわれてきた。こういった傾向の一つとしては，スペインのアントニオ・ガウディの諸作品を，こうした傾向の集中的表現として再評価する動きがあり，また，極めて装飾性のつよいフランスのアール・ヌーボー様式のリヴァイバル等も相伴って姿を現わすようになってきた。両者に共通する極めて豊饒な「装飾」性は，「遊び」の精神の発露とも考えられるが，そこにはまた，合理主義の浸透した社会において非合理的，反機能的なものに魅力を求める心がかくされているといえよう。このような流れの源泉，あるいは母胎をさかのぼって求めると，先に述べたラスキンを中心にしてくり広げられたラファエロ前派の活動やモリスのアーツ・アンド・クラフツ運動にたどりつくことになろう。ラスキンもモリスもともに「近代」がうみ出した文化やシステムを否定し，これをこえる新しい文化や社会の実現のために闘った。彼らは，「労働の質」の変換，即ち，分業システムによる歯車的作業から，「労働そのものがよろこびとなるような労働」[2]への変換を目指し，更に，そのような労働におけるゆとりあるよろこびの表現として「装飾」を捉えたが，彼らのこの考え方が，没後一世紀を経た今，些かの誤解はあるにもせよ，再び，相似のパターンとして認識され始めているといえよう。

カーライルに始まり，ラスキン，モリスに続く直接の師弟の関係で結ばれた一連の人々は，18世紀の後半に生じた産業革命とフランス革命によって，社会的，経済的，そして政治的にも，新しく生み出された「近代」を生きた人々であった。そして，彼らの時代は，工業化，都市化が進み，都市環境の

悪化，粗悪な工業製品，無教養な新興成金の抬頭などの，「近代」の矛盾や弊害が一挙に露呈した時代であった。これに反発した彼らが，期せずして，当時なりの「反近代」のリーダーとなったのは当然のことといえよう。

このような混乱した状況の中で，John Ruskin (1819–1900) は，「中世」というモデルを提示することによって，[3]「近代」を超克し，未来への道を切り開こうとしたのである。彼は，デザイナー，製作者，消費者，即ち，考える人，造る人，使う人という三者の間の安定した秩序が崩壊したところに今日の混乱の一因があると考え，この三者の間に安定した調和が保たれており，更に，それら全部がキリスト教という価値観に収斂していた時代として，「中世」を評価したのである。[4]「中世主義」(mediaevalism) という言葉は，ラスキンが1853年に *Lectures on Architecture and Painting*[5] の中ではじめて用いたことはよく知られているが，彼は，「中世」という時代のかかえていた様々な問題点も指摘した上で，圧倒的な勢いで押しよせる近代化の波に対して，あえて「中世」という時代を反措定として提示したのである。彼は「近代」の矛盾を「中世」というモデルによって批判し，そして，その精神は弟子であるモリスへと継承されていったが，彼らの努力をもってしても，時代の矛盾を完全に解消し，「近代」をのり切ることは到底不可能なことであった。ラスキンやモリスが，時代や社会に対する秀れた洞察力や分析力を示しながらも，彼らの運動に自ら限界があったのは，一つには彼らが「近代」に対する批判的モデルとして「中世」を考えたことであろう。

たしかに，「中世」という時代は，「近代」の矛盾を鮮やかに浮びあがらせるための絶好のモデルではあったが，歴史上はじめて出現したインダストリアリズムに正面から対抗していく為のモデルとしては限界があったといえる。例えば，産業の工業化を不可避な歴史的事実として是認した上で，機械と人間との関係は基本的にどうあるべきかといった問題に対して，より一層積極的な見解を述べるべきであったといえよう。しかしながら，このような事実だけを指摘して，彼らの発想の限界を唱えることはいささか早計である。

なぜならば，彼らの一連の反近代運動は，当時の社会を根本的に変革することはできなかったが，彼らの運動そのものが，「近代」が孕んでいる様々な矛盾や問題点を鋭く告発したからである。そして，まさしく，この点，つまり，提示モデルの当，不当はさておき，問題点を指摘する，その鋭さにおいて，彼らの思想を再考することの現代的意義があるといえよう。なぜならば，彼らが指摘した「近代」の矛盾や問題点の多くは，一世紀を経てよそおいを変えながらも，我々自身の時代がいまだに解決できないでいるからである。

カーライルを終生，偉大な師と仰ぎ，モリスという稀有な弟子をもったラスキンの人生は，まさしく，19世紀イギリスという時代の苦悩を象徴するものであった。ケネス・クラークが *Ruskin Today* (1964) の中で，ラスキン評価の変遷を述べるとともに，ラスキンの今日性を指摘し，その再評価を強く訴えている[6]が，ラスキンのヴィクトリアニズム批判，即ち，先駆的な「反近代」運動の指導者としての偉大さは，価値判断の大きくゆらぐ時代にあってもなお，高く評価されるだけの強さと普遍性をもつものといえよう。時代の矛盾の解決に努力しつつも，次の世代に望みを託そうとしたラスキンの教育観を，その現代的意義をふまえながら考えてみたい。

ラスキンは，ロンドンの豊かな実業家の家に生れたが，極めて厳格な両親により幼少の頃から，隔絶早期英才教育を施された。両親の過剰な干渉は，終生彼を苦しめることになるが，ピューリタンの母親による聖書日読指導をうけ，自然を観察することや，両親と共にイギリス国内やヨーロッパ諸国を旅行し，その思い出をつづった詩作[7]をするなどして幼・少年期をすごした。やがて絵を習い始め，絵画，建築，詩，更に，鉱物に対して多大な関心を寄せるようになった。オックスフォード大学のクライスト・チャーチに入寮後，20歳の時ニューゲィト詩賞を獲得し，また地質学会のフェローとなった。両親の希望であった聖職者あるいは実業家となることを拒否し，絵画に対する自らの才能にも限界を感じた彼は，22歳の時，芸術評論への道を進むことを

決意した。

ラスキンの業績に関しては，1860年頃を分水嶺として，以前を美術評論，以後を社会，経済批判と考えることが通例であるが，1843年，24歳の時に *Modern Painters* 第1巻を刊行して以降，1860年に最終第5巻が刊行されるまでに，*Seven Lamps of Architecture* (1849)，*The Stones of Venice* 第1巻 (1851)，第2，第3巻 (1853) 等の代表的な著作が相次いで刊行された。1851年に *The Times* に掲載されたラファエロ前派に対する非難に激しく反論し，以後ラファエロ前派の人々との交流が始まるのであるが，同時にカーライルの影響を大きく受け，1855年頃から，終生の師と仰いだカーライルのもとで経済学の研究にとりくみ始めた。また，労働者教育や学校教育に対しても大きな関心を寄せ，活発な講演活動を行いながら，*The Political Economy of Art* (1857)，*The Elements of Drawing* (1857) 等を著わした。1859年には，*The Political Economy of Art* と並んで彼の初期の経済論と考えられる *Two Paths* を刊行した。以後，古典経済学批判論文 *Unto this Last* (1860)，読書論 *Sesame and Lilies* (1865)，*The Crown of Wild Olive* (1866)，*Time and Tide by Weare and Tyne* (1867) 等の著作を刊行し，1869年にはオックスフォード大学の美術論スレイド講座の初代教授に推された。1871年から1884年まで，全イギリスの労働者階級の人々に宛てた書簡シリーズ *Fors Clavigera, Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain* を出版し，1872年には，1862年から63年にかけて発表した経済論文を *Munera Pulveris* として刊行した。ラスキンは，この *Munera Pulveris* と *Unto this Last* の中で，古典経済学批判，功利主義批判を行い，倫理性の強い，独自の人道主義的経済学を創設したが，同時に，社会改革の必要性をも強く訴えている。この社会改革への情熱は，やがて，自ら描いたユートピア計画を実行に移すための「聖ジョージ・ギルド」創設へと向うことになった。この壮大なユートピア計画は後の彼の狂気を暗示するものであるが，1878年に最切の分裂症をおこ

して以来，その癇疾に悩まされながらも，オックスフォード大学での講義は終始好評であり，自伝 *Praeterita* (1886–1887) の執筆にとりかかった。以後も闘病生活の中で執筆活動を続け，1900年に80歳で没した。

以上のように，1860年を分水嶺として，ラスキンの関心の対象は，美術から社会，経済にと移り，やがて社会改革家としての道を目指すわけであるが，[8] その間，一貫して熱心な講演活動が続けられた。これは，テレビやラジオといったマス・メディアのない時代にあっては，講演が唯一ともいえる大衆啓蒙の方法であったからである。ヴィクトリア朝の空前絶後の繁栄のかげに失われた人間性の回復や人間疎外の克服がラスキンの終生のテーマであったといえるが，とりわけ，企業の発展に伴い，その要求にあわせて教育を行うという狭い意味の職業教育に走る傾向が強まっていることにも彼は深い危機感を抱いていた。

1858年10月29日，労働者のための美術教育を目的としたケンブリッジ美術学校での就任演説において，彼はまず労働者のための美術教育に関心のある人を次の二種類に分類している。

> ... one desiring the workman to be better informed chiefly for his own sake, and the other chiefly that he may be enabled to produce for us commodities precious in themselves, and which shall successfully compete with those of other countries.[9]

更に，以上二種類の人々がそれぞれ考える教育目的として，'... one philanthropic in the gist of its aim, and the other commercial in the gist of its aim'[10] と分析し，労働者のための美術学校創設に対して二つの異った考え方があることを指摘している。そして，外国製品と対等に競争しうる製品を生産できるように労働者を教育すべきであるという第二の考え方を鋭く批判しているが，これは，芸術教育を，功利的に職業教育と考える当時の政府の政策に対する強い反発のあらわれともいえよう。

このラスキンの発言より26年前の1832年，4月13日に，ロバート・ピール

卿[11]が，下院議会で，一般歳出予算の中からナショナル・ギャラリー創設のための予算を計上するようにという提案を行ったが，これは，「美術」が重要な商業的ファクターであること，つまり，「美術的」な製品が市場競争を制するということを認識し始めた当時の資本家達の考え方を反映したものであった。当時のイギリスの製造工業においては，機械あるいは機械装置は諸外国に比べて優秀であったが，有能なデザイナーの不足に悩み，デザインに関しては諸外国の製品の模倣，追従を余儀なくされていた。このような状況に危機感を抱いた製造業者達は，優秀なデザイナーを育成し，職人達の審美眼を高めるためには，美術館の創設が有効であると考え，政府レベルでの美術の保護，奨励が一層活発に行われることを要望したのである。ハーバート・リードは，このピール卿の提案について，経済問題を論じる議会の論議の中にはじめて美術の問題がもちこまれた記憶すべき事柄としながらも，この時点から，工業製品にあたかも職人の手で加飾されたような装飾を施すという誤った考え方，即ち，'applied art'（「応用美術」）という概念が産業界を風靡するようになった誤りを指摘している。[12] 1932年にリードが *Art and Industry* において，'abstract art' である工業製品に，'humanistic' である「装飾」を付加する 'applied art' の誤りを指摘し，機械時代における機能主義に基づいた工業製品の美，つまり 'abstract art' としての工業製品に関しての概念を確立するまで，[13] ほぼ100年余りに亘って 'applied art' という誤った考え方がイギリスの産業界を支配したのである。

大規模な商業的生産方式が確立されるにつれて，新しく開発された材料や新しい技術を使い，高価な材料を模したり，熟練職人の技術を模倣した製品の製造が競って行われた。その結果，多くの熟練職人達は職を奪われ，工場労働者として単純労働に従事しなければならないという悲劇が生じたが，[14] 一方，手のこんだ装飾や複雑なデザインで高級感を出した製品が安価で製造可能となり，これらの製品は，力を増大しつつあった中産階級の人々に，富や社会的地位を象徴するものとして，大いに歓迎されたのである。こうした

装飾過剰でけばけばしい俗悪な趣味に対するラスキンやモリスの怒りが，後にモリスのアーツ・アンド・クラフツ運動へと発展するわけであるが，ラスキンは，教育者として，こういった時代の大きな錯誤を鋭く見抜き，芸術教育が短絡的に職業教育として利用されることに反対したのである。

故に，ラスキンは，新しく創設されるケンブリッジ美術学校をデザイナーや工芸職人養成のための特殊な教育を施す職業専門学校的な性格をもつ学校にすることを拒否し，次のように述べている。

> Now, I believe it to be wholly impossible to teach special application of Art principles to various trades in a single school ... It seems to me, therefore, that all idea of reference to difinite business should be abandoned in such schools as that just established:[15]

更に，上記の「芸術原理の特殊な応用」，即ち，熟達した特殊な工芸上の技能は，学校が教えるものではなく，'That special application can be only learned rightly by the experience of years in the particular work required.'[16] と述べ，熟達した技能は，教えられるものではなく，経験をつむことによって自ら体得してゆくものだと指摘している。つまり，ラスキンは，ケンブリッジ美術学校においては，「芸術原理の特殊な応用」を教えるのではなく，「芸術原理」そのものを教える教育をすべきであると主張しているのである。また，そのような教育を通して，あらゆる職業についている労働者達に対して，'... teaching, I say, as far as we can, one and the same thing to all; namely, Sight.'[17] でなければならないとし，更に，これは教え甲斐のないつまらぬことであるどころか，既して，教育の全領域の中で最も重要なことである[18] と指摘している。この指摘は極めて重要といえよう。ラスキンは，この 'sight' 即ち「見方」という言葉の中に「観察力」や「分析力」，「洞察力」，「判断力」，更には「思考力」というものまで含めて語っていると考えられるが，こういった力を体得させるために，「芸術原理」を教えることの重要性を強調しているのである。これは，読むものが真実で

あるか，偽りであるか判断する力がなければ，読むことを教えられても何の意味もない，また，主張すべきことがなければ，書いたり，話したりすることを教えられても何の役にもたたないということである。このことは，学生に自然物をはっきりと真実に見させるよう努力することこそが第一に必要なことであり，それを表現する能力を学生に授けようと努力しすぎるべきではない[19]といった主張や，'... to be taught to see is to gain word and thought at once, and both true.'[20] という彼自身の言葉の中に明確に語られているといえよう。このように，ラスキンは，学校で行われる「教育」が，当時大きな力を得つつあった企業からの要求や政府の教育政策によって，専門的な技能や特殊な技術を教えることに重点をおき，全体として極めて近視眼的な功利的職業教育となってきていることへの強い危機感を表明した上で，真の「教育」とは，学生達に「芸術原理」を教えることによって，正しいものの「見方」を体得させることだと主張しているのである。

ラスキンのこの考え方は，12年後の1870年に，オックスフォード大学美術論スレイド講座の初代教授として就任した際の演説においても次のように述べられている。

> ... to be now, oftener than at other times, reminded that the object of instruction here is not primarily attainment, but discipline; and that a youth is sent to our Universities, not (hitherto at least) to be apprenticed to a trade, nor even always to be advanced in a profession; but, always, to be made a gentleman and a scholar.[21]

ここにも，大学における「教育」とは，学生に特殊な技能や狭い範囲の専門知識を与えるものではなく，基本的訓練として正しいものの「見方」をトレーニングによって体得させ，良識ある紳士を育てることだというラスキン自身の一貫した教育観が述べられている。この発言の中には，職業的な特殊な専門知識を教えることや，知識偏重の教育を行うことが大学の役目ではないという，ラスキンの，当時の大学のあり方に対する強い非難の気持がこめら

れているといえよう。更に，彼は，大学教育の目的として，

> But they must first understand, that education, in its deepest sense, is not the equalizer, but the discerner, of men; and that, so far from being instruments for the collection of riches, the first lesson of wisdom is to disdain them, and of gentleness, to diffuse.[22]

と述べているが，この言葉の中には二点の極めて重要な指摘が含まれている。

その第1点は，個性の多様化を主張していることであろう。経済が高度成長をとげ，企業の発言力が大きくなればなる程，優秀な人材の早期獲得という企業のエゴイスティックな要望は強くなり，その力が「教育」全体をゆがめるといった傾向は，わが国の最近の状況にも顕著にあらわれている。そして，このような傾向は，教育の現場においては，画一的な単一の尺度を用いて学生・生徒の能力をはかるという教育方法の強化となってあらわれている。この教育方法の弊害は，人間を画一化した上で，点数によって評価し，切り捨ててゆく人間性無視にある。ラスキンも，まずこの点を指摘した上で，真の「教育」とは，「人々を識別して多様にするもの」と述べているのである。これは，個人がそれぞれ独自の考え方をもち，独自の行動をとりながらも，人間としての価値において普遍的に平等であれば，個性は互いに尊重しあえるものとなり，真の個性化，即ち，個性のゆたかな多様化が実現するという意味であろう。ラスキンのいう個性の多様化は，言葉をかえていえば，人間性の回復とも考えられるが，彼は，このような真の「教育」を実現するためには，大学教育におけるカリキュラムの大胆な改革が必要であると説いている。彼は，まず，真に必要なことは，大学教育の精神を芸術科目の実践にまで及ぼすべきである[23]と述べ，更に，'... it is only by music, literature, and painting, that cultivation can be given.'[24]と主張している。また文学，音楽，絵画等の芸術教育の重要性については，次のように述べている。

> ... accomplished education must include, not only full command of expression by language, but command of true musical sound by the voice, and of true form by the hand.[25]

これは，芸術教育が職業教育化していることへの反論であると同時に，芸術が教育の一環として必須なものであるという考え方が述べられているといえよう。つまり，芸術教育を一般教育の中に大胆にくみこんでいくことで，学生に幅広い教養を与えるとともに，個性的な考え方を育て，個性において多様な人材を育てあげようというラスキンの考え方が表明されていると考えられる。

第2点は，「富」についての考え方である。ラスキンは前述の発言[26]の中で，教育とは富を集める手段ではなく，富を軽蔑すること，及び，富を拡散することを理解させるものであると述べている。前にも述べたように，1860年頃を境にして，後の関心は美術評論から，急速に，社会・経済批判へと移っていくわけであるが，*Unto this Last* (1860) とその続篇 *Munera Pulveris* (1862) が彼の代表的な経済論であるとされている。[27] 副題が 'four essays on the first principles of political economy' となっている *Unto this Last* は，ラスキンの古典経済学批判であり，交換価値のみを重視する功利主義に基づいた古典経済学派の人々の「人間性」のとらえ方に対しての批判が，あらゆる視点から行われている。第1論文 'The Roots of Honour' において，ラスキンは，真の商業については，時には自らすすんで損失をこうむるという観念を入れることが必要である[28]と指摘し，更に，'They must not cease to condemn selfishness; but they will have to discover a kind of commerce which is not exclusively selfish.'[29] と述べているが，これは，企業のエゴイスティックな営利第一主義に対する批判である。'The Veins of Wealth' と題した第2論文では，古典経済学における様々な誤謬を告発し，真の経済学とはどのようなものであるかについて述べている。まず，彼は，古典経済学というのは，ただ財を得るための学問であると述べ，経験に

よって，それは実際に有効であることが一般に知られており，その教えに従う者は実際に富者となり，従わない者は貧者となる[30]と分析し，その誤りを指摘している。また，古典経済学者達に対しては，彼らは商業経済学の諸法則のうち，ごく一部を知っただけであり，真の 'political economy' の法則は一つも知らない[31]と断じている。つまり，功利主義に基づく経済学の最大の欠陥は，人間を全人的に捉えずに，その功利的，利己的な側面にのみ注目したことにあるとラスキンは考えたのである。また，彼は，'rich' と 'wealth' という言葉は峻別して考えるべきであるとし，普通の意味で 'rich' となる術は，絶対的にも究極的にも自分自身のために多くの貨幣を蓄積する術ではなく，隣人が自分自身より少く所有するように工夫する術であり，それは，'... the art of establishing the maximum inequality in our own favour'[32] つまり，相対的優位を保つ術であるとしている。一方，'wealth' については，次のように述べている。

> In fact, it may be discovered that the true veins of wealth are purple—and not in Rock, but in Flesh—perhaps even that the final outcome and consummation of all wealth is in the producing as many as possible full-breathed, bright-eyed, and happy-hearted human creatures. Our modern wealth, I think, has rather a tendency the other way.[33]

つまり，ラスキンは，'rich' は 'poor' という言葉の反対を意味するものであり，ある人や社会の財産を，他人や他の社会のものと比較する場合の財産の大きさを相対的にあらわす言葉であるとしている。一方，'wealth' に関しては，それ自身独自の価値をもつものの集合であると考え，第4論文 'Ad Valorem' の中でも，'Wealth, therefore, is "THE POSSESSION OF THE VALUABLE BY THE VALIANT"'[34] と強調している。

故に，「教育」とは，財を得るための手段ではなく，それを軽蔑することを 'wisdom' によって，またそれを拡散することを 'gentleness' によって理解さ

せることにあるというラスキンの前述の主張[35]の根底には，スミス，リカードウ，J.S.ミル等の古典経済学派の人々に対する強い反発がこめられているといえる。ラスキンは，古典経済学を，財を獲得するための法則を策定する経済学，即ち，'mercantile economy' と呼び，真の 'political economy' と区別すべきであるとし，真の 'political economy' については，ただ有用品，もしくは快楽品を，最も適当な時期と場所で生産し，保存し，分配し，たえず，国民の富と福祉を増大させるものであるべきである[36]としている。つまり，ラスキンは，人的，物質的なすべての資源を浪費することなく，有効に役立て，個人や社会の福祉のために使用するべきだというのである。このような，極めて人道主義的な経済学を標榜するラスキンの，そのモラリストとしての，あるいは説教者としての側面，また，プロテスタンティズムに由来するデモクラティックな傾向は，それが的をついているが故に激しく反発され，敬遠されやすいものであるが，彼の主張は，その普遍性において，今日，改めて検討されるべきものであるといえよう。

最後に，ラスキンの教育論における最大の特色の一つ，「美術教育」の充実を強く訴えている点を指摘しておきたい。彼は論文 'Education in Art' (1858)[37]の中で，'drawing' が教育の中で如何に重要なものであるかをくり返し強調している。ラスキンは，'drawing' とは，主として知識の習得及び伝達の為の一手段とみなされるべきもの[38]と述べ，更に，描画力のある人，即ち，事物の形態を正確に再現し，その色彩を調和させることのできる人は，'a power of notation and description greater in most instances than that of words'[39]を持っていることは疑いないとしている。つまり，彼は「図画」を一種の「言語」と考え，「図画」のことを，形態の記録と関係のある学問，即ち，'science of notation'[40]，「記号論」と呼び，その重要性をくり返して主張しているのである。そして，この「描画力」を学生達に体得させることが芸術教育の根幹となるべきであると彼は考えたのである。更に，「描画力」を体得させる手段として，彼は，'... in our simplest codes of school

instruction, I hope some day to see local natural history assume a principal place'[41] と述べ，いわゆる「郷土博物学」を学校教育の中にとり入れる必要性を説いている。また，「郷土博物学」をカリキュラムの中にくみ込む目的としては，例えば，青少年や子供達に，牧場にはえる薬草を詳細に観察・描写させ，その性質や効用を教えるためであり，郷土の動物を観察したり，かわいがったりすることに興味をもたせるため[42] であるとしている。つまり，「郷土博物学」とは，'knowledge' と 'compassion' を同時に養うための有益な学習[43] であり，また動植物を観察・描写させることによって，「描画力」を高めるという目的にもかなったものであるとラスキンは考えたのである。今日，ブームとなっている「自然教室」や「ワイルド・ライフ・キャンプ」などの重要性に，彼はいち早く注目していたのである。

以上のように，ラスキンの美術評論家としての側面と，社会・経済学者としての側面をつなぐキー・ワードとして「教育」をとりあげ，美術学校における教育，大学における教育，及び，幼少年教育に関する彼の考え方をみてきたが，最後に，彼の「教育」観の今日的意義について考えてみたい。

まず，ラスキンは，美術教育が，企業や政府の要請により，長期的展望に欠けた利己的な職業教育となっていることを批判し，美術学校では，特殊な技能や専門的な技術を教えるのではなく，基本的な芸術原理を教授し，更に，基礎的な観察力，洞察力，判断力，思考力などを含む，ものの「見方」を体得させるよう訴えている。これは，当時のイギリスの工業製品や日用品のデザインの醜悪さを考える時，極めて重要なことと思われる。つまり，良質の芸術を楽しみ，真の美とは何かといったことを考える基本的な態度を体得させなければ，特殊な部分的なテクニックや分化した専門的な技能を教えても，良質なデザインや真に役に立つすぐれた製品を創造することは不可能であるからである。真に美しく良質な製品を，単なる模倣でなく造り出すためには，良いものを良いと見極める鑑識力や洞察力が必要であるのは当然であり，こ

ういった力を体得させるには，基本的な芸術の原理を教授することが肝要であるという彼の考え方は，当時としては異端のものであったが，その主張の，時空をこえる普遍性によって，約一世紀半を経た今日でも，正しい考え方として評価されるべきものであろう。

次に，大学教育に関しては，オックスフォード大学への就任演説の中で，大胆な教育改革が必要であると説いている。ラスキンは，まず，大学の存在理由は，幅広い教養を身につけた「紳士」を育てることであるとした上で，ここでもまた，特殊な技能や狭い範囲の専門的知識は，永年の職業上の経験によって自ら体得してゆくものであるから，大学教育においては，幅広い教養と正しいものの「見方」を体得させるべきだとしている。更に，彼は，単一の尺度で人間の能力をはかる画一的な教育のもつ非人間性を批判し，真の教育とは，人を識別し，その個性において多様にするものであると指摘している。そして，この真の教育こそが，人間性の回復とその健全な発達を実現すると彼は考えたのである。また，個性の多様化を可能にするような大学教育を行うためには，カリキュラムの大胆な変革が必要であると強調し，学生達に幅広い教養を身につけさせるためには，文学，音楽，絵画による芸術教育が極めて重要であり，カリキュラムの中に大胆に芸術教育をとり入れていくことを提唱している。このような改革を実行することによって，はじめて多様な個性の人材の育成が可能になるというのである。今日，一般教育と専門教育の区別の廃止が唱えられ，現実には，文学・芸術関連科目が軽視される傾向があることを思う時，彼の主張の妥当性が痛感されるのである。

更に，ラスキンは，財を追求する商業経済学を否定し，古典経済学そのものへの批判もおこなった上で，真の富，即ち，価値ある人的，物質的資源を浪費するのではなく，如何に個人や社会全体に有効に役立てるべきかを考えるべきであり，このことを学生達に教えることが肝要であるとしている。この経済活動における倫理性の重視は，外にあっては社会主義経済の崩壊，内にあってはバブル経済の破滅のプロセスを通して，今日，唯今，我々自身の

最重要課題となっている。

以上の二点，即ち，大学においては，芸術教育を重視すること，及び，‘wisdom’によって財を軽蔑すること，‘gentleness’によって財を拡散することを理解させ，真の富の意味を教え，その有益な役立て方を考えさせること，この二点は，今まさしく，日本の教育界全体が問われている問題であり，我々はラスキンの考え方に時代をこえた今日的意義を痛切に感じるのである。

また，ラスキンは，幼少年に対しては，芸術教育の一環として「描画力」をつけることが必要であるとし，その具体的手段として，郷土博物学を学校教育の中にとり入れるよう主張している。子供達に動植物を詳細に観察させ，それを描写させることは，動植物に対する知識や同情心を育てると同時に，「描画力」をつけることにもなると彼は考えたのである。1890年に，小学校の必修科目として図画がとり入れられることになったのは，ラスキンやその弟子モリスの強い主張が反映されたからであった。

このように，ラスキンの教育に対する考え方は，ほぼ一世紀余りを経た今日においても，その現代的意義は注目に値するものといえるが，それは，彼の教育観の根底にあるものが，「人間性の回復」という極めて倫理的な普遍性をもっているからだといえよう。そして，このことは，彼の美術評論家としての思想，社会・経済学者としての理論の双方に共通していえることである。

生活環境の悪化，労働疎外，醜悪な日用品や工業製品，功利主義を標榜する新興の無教養なブルジョワジー等，自由放任の資本主義のもたらした弊害に対するラスキンの怒りは，ヴィクトリアニズムに対する挑戦そのものでもあった。このような資本主義社会のもたらした弊害を，マルクスは歴史を検証することによって，科学的に改革する方法を模索し，未来の歴史を見通そうとしたが，ラスキンは，その思想の根本に「人間性の回復」をすえたのである。「人間性の回復」のために，彼は若い人々の力に多大な期待を寄せ，

彼らの「教育」に大きな関心をむけたのである。もちろん，ラスキンには，理想的な社会のモデルとして「中世」を考えざるをえなかったこと，あるいは，「機械」というものに対する認識の欠如など，彼自身の属していた階級的制約や時代的限界があり，現代において，彼の全思想が有益であるとはいえないであろう。しかし，目先の現実への近視眼的対応を否とする，時代をつらぬく洞察力は，功利主義者をも功利的に説得する力をもち，彼の思想の根本が「人間性の回復」という普遍性をもつものである限り，それは，いつの時代にも輝きを失わないであろう。

注

1 近来，新聞，雑誌あるいはその他のマス・メディアを通して語られる一つの社会風潮としての「ポスト・モダン」の解釈は，大体，以上のような言葉で集約できると考えられる。

2 William Morris, 'The Lesser Arts' *Collected Works of William Morris*, Longmans Green and Company, London, 1914, XXII, p. 5., 'Preface to the Nature of Gothic by John Ruskin' *William Morris: Artist, Writer, Socialist*, Russell and Russell, New York, 1966, I, p. 292 等において，モリスは 'plesure in work' という言葉を多く使っている。

3 ラスキンは，*The Stones of Venice* (1851–53) の中で，「中世」という時代の象徴としてのゴシック建築を検証，分析し，その建築及びその時代の優位性を指摘した。

4 ラスキンの「中世」評価に関しては，拙論「Morris が Ruskin より学んだもの」*Asphodel* 8（同志社女子大学英文学会，1975）において，「労働観」を中心に述べた。

5 刊行されたのは1854年。

6 Cf. *Ruskin Today*, ed. Kenneth Clark, Penguin Books, London, 1964, pp. xi-xix, pp. 3–14.

7 ラスキンは11歳の時，湖水地方への旅行の思い出をつづった2000余行の詩，'Iteriad, or three weeks among the Lakes' を書いた。

8 このラスキンの人生の軌跡は，モリスの場合と極めて似かよっているといえる。

9 John Ruskin, 'Inaugural Address' *The Works of Ruskin*, George Allen, London, 1905, XVI, pp. 177–178, 以下 *Works* と略す。

10 *Ibid.*, p. 177.

11 Sir Robert Peel (1788–1850) は，2度にわたり首相をつとめ，1828年に警察制度を完備した政治家として名高いが，紡績機械において巨大な富を築き，産業界にも大きな力をもっていた。

12 Cf. Herbert Read, *Art and Industry*, Faber and Faber Ltd., London, 1956, pp. 15–22.

13 この点に関しては，拙論「William Morris から Herbert Read へ」*Asphodel* 17（同志社女子大学英文学会，1983）参照。

14 ラスキンは，*The Stones of Venice* の中の一章 'The Nature of Gothic' において，この点について詳細に述べている。

15 Ruskin, *Works*, XVI, pp. 178–179.

16 *Ibid.*, p. 179.

17 *Ibid.*, p. 179.

18 *Ibid.*, pp. 179–180.

19 *Ibid.*, pp. 180–181.

20 *Ibid.*, p. 180.

21 Ruskin, *Works*, XX, p. 18.

22 *Ibid.*, p. 20.

23 *Ibid.*, p. 21.

24 *Ibid.*, p. 36.

25 *Ibid.*, p. 35.

26 Cf. 注22.

27 この他にも 'The Political Economy of Art' (1857)（これは，*A Joy for Ever* として出版された），*The Two Paths* (1859), *Time and Tide by Weare and Tyne* (1867) 等があげられる。

28 Ruskin, *Sesame and Lilies, Unto this Last and the Political Economy of Art*, Cassell and Campany, Ltd., London, 1907, p. 124.

29 *Ibid.*, p. 123.

30 *Ibid.*, p. 129.

31 *Ibid.*, p. 129.

32 *Ibid.*, p. 133.

33 *Ibid.*, pp. 142–143.

34 *Ibid.*, p. 174.

35 Cf. 注22.

36 *Ibid.*, pp. 130–131.

37 この論文は，1858年の秋に 'The National Association for the Promotion of Social Science' において代読され，その年度の協会会報 pp. 311-316 に掲載されたものである。

38 Ruskin, *Works*, XVI, p. 143.

39 *Ibid.*, p. 143.

40 *Ibid.*, p. 143.

41 *Ibid.*, p. 144.

42 *Ibid.*, pp. 144-145.

43 *Ibid.*, p. 145.

1991. 9. 30 受理

Synopsis

Ruskin's View on Education

Mami Yamada

John Ruskin (1819–1900), who was called 'intelligence of the nineteenth century', is well known as an art critic, a political economist and a social reformer. He was a moralist and preacher, and throughout his life he felt bound to consider every subject from art to political economy. He allowed his mind to pass from one subject to another without a break.

He indicted fiercely the evil effects which were produced by the social and economic system in Victorian society. And he thought 'education' must not be distorted at the request of enterprises. He stated, in his inauguration as a professor of Oxford University and Cambridge Art School, that school deucation should be different from the vocational one. That is, the true object of instruction at universities is to make a cultured 'gentleman'. To do so, he says, is to teach 'Sight', which includes a power of observation, an insight, understanding and judgement, and it is more vitally necessary than teaching special techniques or narrow expert knowledge.

Then he pointed out that 'education', in its deepest sense, is not to equalize but to discern men. And, he stressed the necessity to reorganise the curriculum at universities. He says, 'the thing which is vitally necessary is that we should extend the spirit of university education to the lower arts', and 'it is only by music, literature and painting that cultivation can be given'. And he also claimed that

students should learn the meaning of true wealthand its right uses and should be taught 'to discover a kind of commerce which is not exclusively selfish'.

Considering the present situation of the Japanese society, Ruskin's remarks are vitally important for us all. Today, we have accepted the notion that social, economic and educational problems cannot be separated from moral issues. So we have to examine his way of thinking about what constitutes true university education.